スパイ小説「ウルトラ・ダラー」の作家・手嶋龍一さんに迫る

手嶋龍一（てしま　りゅういち）
外交ジャーナリスト・作家
ＮＨＫワシントン支局長を経て独立、日本は新たな「インテリジェンス大国」を目指すべきだと唱える気鋭の論客でもある。２００７年、慶応義塾大学教授就任。
主な著作　ベストセラーとなった「ウルトラ・ダラー」、「たそがれゆく日米同盟」、「外交敗戦」、「ライオンと蜘蛛の巣」、「インテリジェンス　武器なき戦争」（共著）など

西野鷹志（にしの　たかし）
本誌発行人

□ラジオはお洒落なメディア

西野　昨年の秋、ＦＭいるかの「カフェ・ペルラ」でお会いして以来ですね。あの時は、手嶋さんが何の前触れもなしに、カフェに座っているのを見て、ちょっぴり驚きました。

手嶋　旅先で原稿の校正ゲラに手を入れなければならないことが時折あるのです。そんな作業にぴったりの喫茶店がある街は、やはり魅力に溢れています。函館という街は、とりわけ「カフェ・ペルラ」は、書き手にとって、居心地のいい全ての条件を兼ね備えています。

西野　心地いい条件とは、どんなものなのでしょう。

手嶋　陽光がいっぱいに溢れた明るい空間。吹き抜けの天井から降り注いでくるさわやかな音楽。あの時はたしか「ゴンチチのギター曲」。それに適度な高さがある広々としたデスク。

僕はとても気持ちよく作業をしていて、ふと見上げるとガラス張りのラジオ・スタジオが見えるではありませんか。「ああ、前にお会いした西野さんの名刺には、たしか『ＦＭいるか』と書かれていたな」と思い出しました。

そして「突然ですが、お会いできますか」と係の方にお願いしたところ、ケーブル会社から飛んできてくださった。お邪魔虫で済みませんでした。

西野　手嶋さんは、本当にラジオというメディアがお好きなんですね。

手嶋　だって、テレビよりどことなく温もりがある。とりわけ、僕は小さなラジオ局が好きなんです。それで、わがインテリジェンス小説「ウルトラ・ダラー」の主人公もＢＢＣラジオの特派員というわけです。

西野　「いまからラジオの生番組に出ていただけますか」という唐突なお誘いにも、二つ返事でマイクの前に座ってくださいましたね。

手嶋　ランチタイムの番組「暮らしつづれおり」というタイトルでした。そのなかで「ＮＨＫ特派員を永年やっていて、こんなことを言うのは、申し訳ないのですが、僕はどうもテレビに出るのが嫌いなのです」と白状したんですね。テレビは、準備に手間をかけすぎ、とかく枠にはまりがちです。その点、ラジオは自由でいい。現にＦＭいるかでは、タイムテーブルもかなり柔軟で、事前の打ち合わせもあまりしない。ライブの醍醐味が発揮されています。台本どおりなんてのは、やっぱりつまらない。

西野　海外のラジオ局をたくさん訪ねられ、様々な歴史を持つ放送局をご覧になったのでしょうね。

手嶋　ええ、それぞれのラジオ局には巧まざるドラマが刻み込まれています。１９５６年、ソ連軍が雪崩れ込んだハンガリー動乱のときの事です。首都ブダペストのラジオ局は、全土のハンガリー軍に「クレムリンへ最後の抵抗を試みよ」と呼びかけていました。そのため、ラジオ局は、ソ連の戦車群から標的にされ、建物は蜂の巣のように銃撃されました。いまもラジオ局の壁には銃痕が生々しく残っています。

西野　ハンガリーの動乱は半世紀まえですね。反クレムリン派の首相ナジが、「わが国土にソ連軍の戦車が侵入してきた。西側陣営はまもなく援助に駆けつける。それまで独力で抵抗を」とラジオで絶叫したのですね。

手嶋　ウエスト・バージニア州の山道を車で走っていると、一軒のログハウスがぽつんと立っていました。コーヒー・ショップだと思って、飛び込んだところ、老人たった一人でやっている「ボブ・ディラン」専用のラジオ局でした。

マグカップを傾けながら話し込んでいると、老人は生放送に切り替え、突如、スコットランドからやってきた自分の家族の肖像を語りはじめたのです。これぞラジオという感じがしました。「わがいとしのラジオ局よ」と呼びたい想い出です。

西野　アメリカの山中の老人ひとり局も、いかにもアメリカらしい話ですね。

ところで、地域FM開局1号局の「いるか」も、昨年で15周年を迎えました。いまでは全国の仲間が２００局を越えました。身近な街角ラジオが、市民とスポンサーに熱く支えられて、広がっています。これからも、手嶋さんの言う「お洒落で、温もりあるラジオ局」を目差していきたいと思います。

□道産子

西野　テレビの印象では、手嶋さんは都会育ちだと思っていました。ところが、純粋種の道産子なんですね。

手嶋　わが父は、石炭が「黒いダイヤ」と呼ばれていた頃の炭鉱主でした。ところが、僕が物心つくころには、石炭は石油に取って代わられ、父の炭坑も零落の一途を辿っていきました。ですから、僕は高度経済成長とまったく逆のコースを辿って成長したのです。

西野　没落炭坑主のお坊っちゃん。失礼ながら、そんな雰囲気が端正でソフトな顔立ちから今もただよってきます。でも、生活が激変する環境のなかで、周囲には、とても個性的な大人たちがいたことでしょうね。

手嶋　そう。旧満州国の高級官僚や旧軍の作戦参謀、それに大衆団交の後に、たんまりとお土産をもらって引き上げる炭労の幹部など、さながら人間動物園のようでした。雑多な人間が父を取りまき、終戦時の日本社会の縮図のようだった。だから、戦後の民主主義といっても、その素顔は、学校で習うのとは、ずいぶんと違うと、幼心に思ったものです。

西野　そんななか、学校生活は大変だったでしょうね。

手嶋　いいえ、北海道に育ちましたから、受験勉強ともほぼ無縁でした。学校がきらいな僕のような子供にとっては天国のようなところでした。

じつは、中学の同級生だった女の子が、僕が高校に通うバスの車掌さんになっていました。10円の乗車券を買おうとすると、彼女は黙って首を振る。「ただにしてあげ

る」。とっさに、彼女の好意を黙って受けたほうがいいと自分に言い聞かせた。一歩早く社会に出た者の矜持を大切にしなければ、と少年ながら思ったのでしょう。去りゆくバスの後姿を見送りました。僕にとっては、大切な出来事となりました。中学を出るとすぐに実社会に出たクラスメートがいる。そんな環境は、僕にとっては、何よりの教育でした。

西野　感受性豊かな手嶋少年でしたね。僕も北海道育ちですから高校三年生になってから慌てて受験勉強を始め、東京から短波で送られてくるラジオ大学受験講座を深夜聞いていたが、睡魔には勝てず朝まで眠りこけ、よだれを机のうえに流していた。いま思うと、のんびりとした時代でしたね。

□より広い世界へ

西野　ＮＨＫに記者として入局され、「あれこれ上司に命令されるのはかなわない」と給料を受け取らなかったという武勇伝が伝えられていますが。

手嶋　はなはだ心がけのよからぬ社会人一年生でした。困らせた当時の上司には本当に申し訳ないことをしました。

じつは、炭鉱をたたむ際に、かなりの資金がいるものですから、家にあった株でかなりの勝負をしていたのです。炭鉱株はボロ株になっていたのですが、金余りの世相を反映して、無配株が投機の対象となって値上がりしました。それを売ってアラビア石油株に乗り換えてひと相場をあてたのです。ですから、大学を出る頃には、若者としては、かなりのゲンナマを手にしていたのです。それで、就職しなくてもよかったのですが、やはり世間体がわるい。そのころ読んでいたスパイ小説の主人公がＢＢＣの放送局員にしてスパイ。日本ならＮＨＫの試験でも受けて、しばらく凌ごうと。まことに不純な動機でジャーナリストになったのです。申し訳ありません。

西野　ＮＨＫの初任地が北海道の室蘭だったそうですね。そこで新人が給料を辞退し、そのかわり上司の指示を受けたくない、と。大組織のなかでは、さぞかしコントロールのきかない、扱いにくい存在と映ったでしょう。いまの柔らかな物腰から想像もできませんね。意外な素顔をお持ちですね。

組織にへつらわず、形にとらわれないからこそ、そのあと、世界に羽ばたいて活躍できたのでしょう。室蘭の後はどんな道を歩まれたんですか。

手嶋　横浜放送局を経て、政治部で外務省、首相官邸、自民党などを担当したあと、冷戦終焉時のワシントン支局特派員、ハーバード大学特別研究員、さらにはドイツ・ボン支局長を経て再び古巣に戻ってワシントン支局長になりました。

西野　まさにこの間、世界は大きく揺れ動いていましたね。記者として多くの歴史的な大事件に遭遇したわけですね。

手嶋　ＮＨＫに入った動機も、まったく自慢のできないものでしたから、プロのジャーナリストとしてやっていける自信などなかったのです。突然、ワシントン支局への異動を命じられたときも、英語のＲとＬの発音を正確にしなければ、相手に伝わらないという自覚もありませんでした。しかも情報戦の主戦場ワシントンには土地勘もなく、人脈もコネもない。そんな新参者がホワイトハウス、国防省で取材しても、歯が立つわけがありません。アイガーの北壁を素手で登るようなものです。

そんな日々を送っていたのですが、ある日、一本の電話がかかって来ました。「龍一はおまえか？」。オックス・ブリッジのアクセントでした。かつて関税問題で力を貸した英国の駐日大使がいずれ借りを返すといっていましたので、もしかすると、と思いあたったのです。それは、ホワイトハウスの中枢につながる超一級の情報源でした。その日を境に、ワシントンでの人脈が一挙に広がっていきました。

西野　それからまさに芋づる式。でも、機密につながる情報源が漏れると一大事ですね。

手嶋　ですから重要なニュースソースと

なる人物と接触する取材費は、すべて自前でした。会計書類に取材先の名を書けば、情報源が危険にさらされる。そのためには、自分の属する組織とも、一線を画して、インディペンデントな存在を心がけなければなりませんでした。僕らの仕事は誰に忠実であるべきかを問われます。忠誠を尽くすべきは、組織ではなく、視聴者であり読者なのです。

□9・11同時多発テロ事件

西野　２００１年９月11日同時多発テロ。たった一日でその後の世界の風景がガラリと変わったテロ事件をワシントンから、24時間生中継、11日間連続で放送し続けたのですね。多彩な情報と的確な分析で見る人を引きつけ、まさに圧巻そのものでした。

手嶋　緊迫した事態がつぎつぎ明らかになり、おびただしい量の情報が押しよせてきました。放送の編成は、あれ程の事件が起きると瞬時にすべて白紙となり、際限のない生放送が続く異例の事態となります。ああいう局面では、それまでの経験に頼って、とっさの判断で刻々とニュースを皆さんにお伝えするより方法がありませんでした。

西野　あのとき、ネットにファンサイトが作られるほどの時の人に。でも極限のなかの極限。報道のプロフェッショナルとは苛烈なものですね。おおいなる敬意を表します。

□スパイ作家の誕生

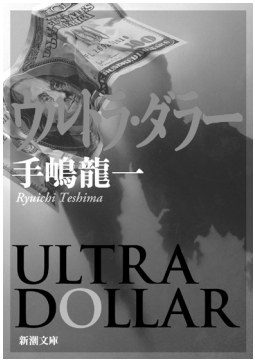
西野　手嶋さんは、ＮＨＫワシントン支局長の職を自ら希望して離れ、インテリジェンス小説「ウルトラ・ダラー」の執筆に取り掛かりました。こうして世に出た著書は、たちまちベストセラーとなりました。なぜ、スパイ作家へ変身されたのですか。

手嶋　書き手ということでは、現役の記者時代から、ノンフィクション作品をすでに書いていました。新潮社が手がけてくれ、多くの読者を得ることができました。「たそがれゆく日米同盟　―ニッポンＦＳＸを撃て―」、「外交敗戦」は、新潮文庫として、いまも読みつがれています。この二冊のノ

ンフィクション作品は、作家として、独立してやっていく際の重要な出発点となりました。

しかしながら、大きな組織のなかに身を置いたまま、個人の著作活動をしていると、ワシントン支局の部下たちに想わぬ累が及ぶ心配があります。ここらが決断のしどころかな、と思い独立させてもらうことにしました。その第一作が「ウルトラ・ダラー」でした。

西野　本屋に走り、一晩で一気に読んでしまった。ダブリンで見つかった真贋の区別がつかないほど精巧な偽１００ドル紙幣＝ウルトラ・ダラー、マカオでの資金洗浄などなど、小説とは思えないほどのリアリティがありました。ノンフィクションなのでは？



手嶋　出版される前年の夏には骨格をほぼ書き終えていた。その時点ではまだ現実になっていないが、近い将来、高い確度で起りうると判断できる確かなインテリジェンスをもとに書いたのです。複数の情報源から得たインテリジェンスを基礎に、情報源の秘匿を最優先して、小説の形をとったのでした。

西野　小説に書かれたことが、その後つぎつぎと一連の北朝鮮情勢で現実となりました。手嶋さんの凄みを物語っていますね。

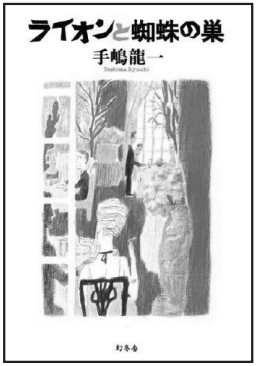
手嶋　函館元町が舞台のひとつで、函館とサハリンとの定期便も登場する。ぜひお読みいただければと思います。

□蜘蛛の巣は百獣の王をも捕らえる

西野　手嶋さんの著作のなかで、一番好きなのが「ライオンと蜘の巣」です。手嶋さんの世界に巡らした有数なる人脈は、ノンフィクション「外交敗戦」などが評価されて招かれたハーバード大学国際問題研究所のシニヤ・フェロー時代に築かれたそう

ですね。そんな人々が生き生きと描かれている。

手嶋　ワイシャツはズボンからはみ出し、ネクタイは安物ポリエステル。ハーバードで生活をともにしたその人は、実はスペインの有力紙オーナーにしてカルロス国王の無二の親友でした。さらにコロンビアの国防大臣、イギリスのフォークランド総督などなど。



世界中から集まった16人の仲間の絆は今もって堅いものがあります。僕にとっては、宝物のような情報と人脈のネットワークです。東京にやってきた寿司好きのスペイン人、あの富豪のディエゴを先日、ガード下の寿司屋に招いたらひどく喜んでいました。

西野　湾岸戦争のとき多額の戦費を負担した日本が、なぜ国際社会から評価されなかったかを検証した「外交敗戦―130億ドルは砂に消えた」は、その後20年近い時を経ても、今の日本に同じ問いを突きつけています。いま、経済力の低下もあり、まさに漂う日本の姿。国際社会でしたたかに、たくましく生き抜くには、どうすべきでしょうか。

手嶋　国家の指導者には、使命感、言葉による優れた発信力、それに歴史感覚が求められます。彼ら、国家の舵取りを委ねられた人々に、確度の高い情報―インテリジェンスを提供するシステムも欠かせません。それらの情報をもとに、指導者は、インテリジェンスの重みを判断し、情報の真贋を見分け、国家の針路を決断しなければなりません。そして、自ら下した決断の結果責任を取るのが真の指導者です。

□故郷北海道

西野「ライオンと蜘蛛の巣」のなかに、米東海岸のカジノでルーレットに興じ、そ

こにはあの名馬ディープインパクトの誕生につながるエピソードが出てきます。なかなかの競馬通とお見受けしましたが。

手嶋　毎年夏には、執筆場所のノーザンファームから津軽海峡を望む函館競馬場に来るのを楽しみにしています。

そう、あの名馬ディープインパクトを生んだ北海道早来のノーザンファームで執筆をしています。じつは、「ウルトラ・ダラー」の四分の一は、ノーザンファームで書き上げたのです。オーナーの吉田勝己さんとは、カジノにも出かけるギャンブル仲間にして親友です。

西野　なるほど。手嶋ファンのために、次作の予定とか構想がおありですか。

手嶋　「ウルトラ・ダラー」の主人公スティーブンは、物語の最後で、敵に襲われて遭難してしまいます。作者である僕は「死んでしまったのでしょう」といっているんです。ところが、出版元の新潮社は「主人公が死んでしまったなどといっているのは、作者ひとりですよ」と承知してくれません。最近では、スティーブンの姿を日本海側の都市で見かけたという目撃情報も出ています。極秘のインテリジェンスでは、どうやら金沢の東の茶屋街の周辺に潜んでいるらしいのです。

西野　夏、函館競馬をお楽しみの合間にFMいるかにぜひ遊びにいらしてください。その折にはまた楽しいお話を伺えることを心待ちにしています。

昨年の夏と秋、手嶋龍一氏と大学同窓のよしみで旭川、函館で交わした話をベースに、その後、互いにやり取りをかさねて本企画が実現しました。ご多忙のなか、感謝あるのみです。故郷北海道、さらに、地域の小さなメディアであるラジオとタウン誌へ寄せる氏の温かい眼差しを感じました。「ウルトラ・ダラー」続編での主人公スティーブンの活躍を首を長くして待っています。

（西野記）